

天體一夜話

備中 平松 誠 一

大正十年十月三十日午後六時廬を出で、西を臨むと山際には大角(牧夫座)や角宿二星(乙女座)等が有る筈であるが、尙其の次の亢宿四星(乙女座クシ)も共に讒にかゝつて見えない。次の氏宿四星(天秤座)も房宿四星(蠍座)此の正北にある貫索九星(北冠座)が今宵は鮮かである。又心宿三星(蟹座)は最もよく輝いて居た。尾宿八星(蠍座)は山の蔭になつて一部は見えないが、次の箕宿四星(射手座)は小さけれども形が不等四邊で見分けよい、その次の斗宿六星(射手座)は北天の大熊座北斗とは形ちは小さいが能く似て居るので其の星に對して、是れを南斗といひます、そして房宿から斗宿に至る間には天市垣てふ大いなる一座がある、是れは此の邊の大舞臺である、今宵は一星も障りなく見えて居る、その又次に北天の天津九星(白鳥座)は丁度天河に橋を架けた様に見え

て居る。こゝから天河が東西二派に別れ共に南流して尾宿と箕宿との間に合して又一河となつて南流して居る。今宵は能く晴れ切つて居るから天河が鮮明である、その二派の東岸には牽牛(河鼓)三星(蟹座)西岸には織女の三星(琴座)がよく輝いて居る、其の両河の中央には白鳥の飛ぶが如き勢を呈して居る天津九星がある、而して牛宿六星(山羊座)は斗宿より餘程東に難れ位置は黃道にかゝつて之れは一星(山羊座)のみは大きく他の五星は至つて小さいけれども今宵は皆よく見えて居る。又女宿四星(水瓶座)は星は小けれども前の箕宿に形がよく似て見分けよい星である、次が虚宿二星(水瓶座)之れは赤道を跨がつて居る、其の次に花宿二星(水瓶座)がある、之れは圭形をなし即ち二等邊三角形で見出しよい星座である。此の星座が今宵六時半頃には殆んど子午線に當つて居る、其の正北には人四星(ペガソス座)及び杵三星(蠍座)白四星(白鳥座)等、星は小さくとも能く見えて居る。壁宿二星(ペガソス座)は共に赤道以北に高く位し此の二宿の丁度分點の東西に跨

がつて共に大星で鮮かに輝いて居る、次が奎宿十六星（アンドロメダ座エー、ゼ、イ、エブ、カ、ピ、ヌ、）で此の星は小さきも其の座は大きく不規則なる環状をなして居て一つ一つの星はなかく見出しがたいが此の星座を見出すのは容易である。其の正北に王良五星（カシオペイア座ア、イ、エブ、ア、セ、ヌ、）の内三星と閣道六星（カシオペイア座ベ、カ、エー、ム星）の内三星と他の一星即ち策（カシオペイア座セ、ヌ、）の内の二星と他の一星即ち策（カシオペイア座オミ星）の内の二星と他の一星即ち策（カシオペイア座）よりなる有名なるカシオペイア座がある、其の形は申す迄もなく鮮かにW形に見えて居る。北極星から此の中央を一直線に貫いて極星より六と四との割合の處が丁度奎宿の中央に當つて居る、此の外には便よる星が見えない、而して次が婁宿三星（牡羊座ベ、）胃宿三星（牡羊座ベ、）で今宵は少し薄雲がかゝつてはつきりとは見えなかつた。其の眞北に高き天船九星（ペルセウス座エー、ガ、ア）は鮮かに見えて居る、其の東天山際より高度約十五、六度の處に靄の中に昂宿即ちスバル七星（牡牛座ク、エ、ド、）の一群が薄つすり見え、山際よりは五車五星（駝者座イ、ア、ベ、）の内の大なる二星が南北に並んで見えだした。先づ今宵はこれを以つて、一巡見盡したから一と切りとして廬に這

入り茶を一服喫せんとしましたら首が凝つて屈まなかつた、併し又夜半頃に至らば觜宿三星（牡牛座ラ、フ）參宿七星（オリオン座セ、エブ、）即ち有名なるオリオン座が中天近く登つて一入の見物であらうと心を残して寢についた。

右は十月三十日夜分岡山支部例會に出席されなかつた平松翁が自宅で天を眺め、想ひを岡山の空に馳せて筆を執られた一文に洋名を附加したのである。西洋天文を研究すると同時に支那天文も忽にすべきではない、殊に吾々は支那天文の知識をも併せれば東洋文化の淵源を明にすることが出来ないから幸ひこの翁の夜話によつて入門を得た事を切に喜ぶものである。（水野支部幹事）

古川曰く

平松翁は空の星を見て直ちに支那名で言ひ表されるのは甚だ感服の至りで、恥かし乍ら余は一度特別名稱又はバイエル式命名法を想起し、然る後辛うじて支那名を思ひ浮べる丈で然も其の數は十個内外である。支那名は古書を調べるに是非とも必要で水金火木土の五惑星を夫れ々々辰星、太白、熒惑、歳星、鎮星と稱へ、恒星にも亦翁の言はれる通り色々な名稱がある。例へば類聚國史に延暦廿二年（中皇）老人星見とはカノプスの現はれた事で、續日本記に天正五年（中皇）熒惑入軒轅とは火星が獅子星座の中に入つた事で、同じ本に神龜二年（中略）太白晝見とは金星が晝間肉眼に映じた事である。